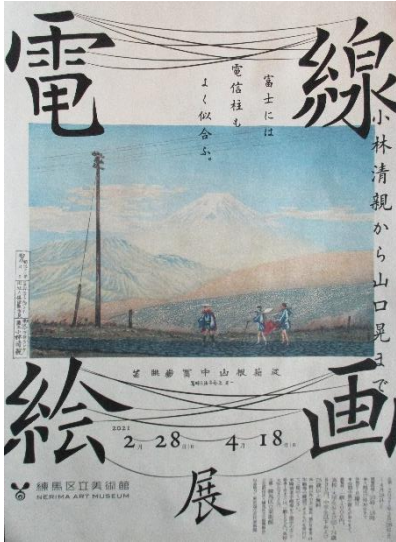


## 電線絵画展 小林清親から山口晃まで

練馬区立美術館(中村橋) 2021.02.28~04.18



街中を縦横無尽に走る「電線」は、青空を遮り景観を損ねるため忌み嫌われやすい一方、そのような雑然とした雰囲気は、人々が幼い頃から慣れ親しんだ街の風景を織りなすもので、場合によっては少々郷愁すらも呼び起こすものである。

本展は、明治時代～現代まで美術作品に描かれた「電柱や電線」に注目し、日本画や油彩画、版画、現代美術作品など「約130点の作品」から、各時代において「電線や電柱」が果たした役割と、時代ごとに絵画化された作品の意図を検証し、そこに向けられた人々の眼差しの変遷をたどろうとする全くユニークな企画である。

小林清親《從箱根山中富嶽眺望》 1880(明治13)年 大判錦絵 上図

日本で電信柱が設置され、電信線が街中を走るようになったのは1869年とされ、その様子は浮世絵や油彩画に文明開化の象徴として描かれている。

画伯は、画面の真ん中に堂々たる電信柱を描くのみならず、富士山と組み合わせることで自然への畏怖と近代化への誇りとが交わる新しい風景画である。



岸田劉生《代々木付近 (代々木付近の赤土風景)》 油彩/カンバス 1915年

東京が拡大していく証として描いた作品は、地面には二本の棒状の影が盛り上がる地面を制するように落ちていて、その正体が電柱であることがわかる。

川瀬巴水《東京十二題 木場の夕暮れ》 木版画 1920年 中

山口晃 《演説電柱》 ペン、水彩、紙 2012年 右